

平成21年 5月29日現在

研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18730554  
 研究課題名（和文）子どもの意味産出行為の分析による芸術教育のカリキュラム開発に関する研究  
 研究課題名（英文） A Study of curriculum development by analysis of child's act as *Significance*  
 研究代表者  
 新野 貴則（NIINO TAKANORI）  
 山梨大学・教育人間科学部・准教授  
 研究者番号：60353380

## 研究成果の概要：

本研究課題は、芸術教育活動における子どもの活動を記録・分析することによって、子どもの意味産出の行為を実現するカリキュラム開発の視点を明らかにするものである。

実際に子どもの活動を記録・分析することにより、意味産出の行為を実現する子どもの活動は、子どもの行為と行為、他の子どもや教師の行為、材料や用具、活動する場などとの複雑な意味関連かたちづくりが明らかにされた。したがって、題材開発の際には、子どもが主体的に活動でき、活動を複雑に展開できるようにする視点が求められる。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,700,000	0	1,700,000
2007年度	1,000,000	0	1,000,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	150,000	3,350,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：カリキュラム構成、カリキュラム開発

## 1. 研究開始当初の背景

学校教育において、カリキュラム開発は継続的に行われることが求められている。そして、学校教育に関わる諸研究機関においては、カリキュラム開発に資する研究を行うことが継続的な課題である。研究者自身、このよう

な課題の一助となることを目指し、これまで芸術教育の分野（特に美術教育）のカリキュラム開発に関する研究を行ってきた。

これまで取り組んできた研究（科学研究費補助金による研究 平成 15-17 年度「芸術にかかわる教科等のカリキュラム開発に関する基礎的研究—テキスト理論を基盤として—」）では、今日の芸術のジャンルの境界が

あいまいになるほど多岐にわたり、かつ、変化している状況を踏まえ、美術や音楽などといった教科の枠組みにとらわれずに芸術教育をとらえてきた。そして、言語学や現象学の諸理論にもとづきながら芸術的な活動として意味を産出・生成する行為を子どもの学びとしてとらえ、その論理を構築してきた。これに加え、実践的研究によってそれを検証し、芸術教育における学びの論理を再構築するという一連の研究を通して、理論的研究と実践的研究の両側面から、芸術実践として子どもの学びをとらえる、芸術教育にかかわるカリキュラム開発の視点の構築を目指した。

## 2. 研究の目的

本研究課題は、上記に示した考え方にもとづく研究の一環として実践的研究の立場からアプローチすることを目指すものである。子どもの芸術実践としての学びを、意味産出の行為ととらえ、これを分析することによって、カリキュラム開発の過程（計画 plan→実践 do→評価 see）における評価と評価にもとづく学習指導の工夫改善（評価 see→計画 plan）に資する視点を構築する。つまり、子どもの意味産出の行為を論理的にとらえることによって、いわゆる潜在的カリキュラムを顕在化し、カリキュラム開発の視点を構築するものである。

その具体的な手続きは、まず、1～2 単位時間の連続する授業における特定の子ども（およびグループ）の活動の展開を図式化することによって構造化する。子どもの活動の構造化は、子どもの行為に意味づけをし、子どもの行為と行為のあいだの意味関連をとらえることによって行う。次に、この構造化した子どもの学びの活動から、意味産出の行為に焦点を当てて分析する。会話や視線の動き、周囲の状況等を詳細に記録するとともに、その子どもに対するインタビュー調査等も参考にすることによって、子どもの行為の複雑な意味のネットワークをとらえる。そして、子どもの意味産出の行為と授業内容、教材、活動する教室の状況、教師の指導方法等との

相互関係をとらえる。本研究課題では、このような手続きによって、子どもの意味産出の行為を複数の角度から分析し、それが実現する条件、状況等を明らかにすることを目指す。

## 3. 研究の方法

### (1) 授業記録の収集

まずは主に子どもの行為を分析するための授業記録の収集・整理を行う。記録する授業は、小学校から中学校までの芸術教育にかかわるものとし、図画工作、美術を中心に、可能な範囲で音楽、体育（ダンス）、国語、総合的な学習の時間の授業の記録を収集する。いずれの授業についても可能な限り多くの授業を記録することを目指す。

具体的な授業の記録方法は以下の通りである。

#### ①授業前

授業に先立って、年間指導計画、単元・題材の学習指導案の収集とともに、教室の設備状況等の記録をする。

#### ②授業中

授業をVTRによって記録する。ビデオカメラは複数台用意し、一つは(a) 教室全体の様子を記録し、その他2～3台はそれぞれ(b) 特定の子ども（グループ）の活動を記録するものとする。

(a) 固定カメラ（三脚付き）により教室全体を記録する。基本的にカメラは動かさないものとし、幅広い範囲を撮影することのできるワイドコンバージョンレンズ及び音の発している方向が分かるステレオマイクロホンを活用する。

(b) 2～3台のカメラによってそれぞれ特定の子ども（グループ）の活動を記録する。基本的に一つのカメラで授業の最初から最後まで一人の子ども（一つのグループ）の活動を記録する。その際には、ガンズームマイクを活用し雑音を極力記録しないようにする（特に美術や音楽の授業を記録する際に必要となる）。

#### ③授業後

記録の対象とした子ども（グループ）への

インタビューを実施し、VTR に記録する。インタビューは基本的に授業後すぐに行う。また、あらかじめインタビューガイドを作成し、これにしたがってインタビューするが、状況に応じて質問の内容を追加する。また、実施した授業の内容等について、教師へのインタビュー調査も行うものとする。

なお、記録は参与観察のかたちをとることになるが、本研究課題では、授業へ参加するという立場ではなく、無理のない範囲で観察者の立場をとることとする。

また、学校側の負担も考慮し強引な協力依頼は行わないようにし、授業記録を増やすことよりも学校との信頼関係を築くことを重視する。また、報告書に用いる画像については、ぼかし等の処理によって個人を特定できないようにする。

## (2) 授業記録の分析

授業記録をもとに子どもの意味産出の行為の分析を行う。具体的には、以下に示す手続きに基づいて行う。

①子どもの行為の意味を一つひとつとらえ、その関係をコード化することによって図式的に表し、子どもの学びの活動の展開を構造化する。具体的には、まず、特定の子ども（グループ）を記録したVTRから、子どもの行為の意味を一つひとつ文章化する。次に、これらの関係を図式的に表す。子どもの行為の意味はその前後の行為、他者の行為、会話、表現された作品との複雑な関係をかたちづいている。それらの関係をコード化（ex. 選択、視線、会話、想起等々）する。その結びつきを図式的に表すことによって子どもの学びの活動を構造化する。なお、これを行う際には、授業全体を記録したVTRを参照する。また、分析者の先入観などをできる限り排除するように、授業後に行うインタビューの記録によって検証するものとする。

②子どもの意味産出の行為に焦点をあて、詳細にその行為の意味分析を行う。その行為の意味が他のどのような意味と関係付けられ、また、その関係がどのように生じ、つくりかえられていくのか、その過程をとらえる。具体的には、その行為が実現された場の状況、他の子どもとの会話、教師との会話、視線の

動き、そして、授業における活動全体においてその行為がどのような位置づけにあるのか（その行為が上記①で述べた構造図においてどのような場面に位置づけられるか）明らかにし、それがどのように展開しているのか具体的に記述する。

③上記の①の活動の構造図において、②の行為が出現するポイントを印づけ、整理する。また、②の行為が生じている状況について表などを用いて整理する。これらの資料をもとに子どもの意味産出の行為がどのような状況において見出されるのかとらえ、類型化を試みる。

④子どもが取り組む題材、活動する教室の状況、教師の指導方法等について類型化を行い、上記③で行った分析結果と照らし合わせ、それらの関係をとらえ、因果関係があるかどうか明らかにする。因果関係がある場合は、それがどのようなものか具体的に示す。

## 4. 研究成果

授業の記録は、関東地方、関西地方、四国中国地方、九州地方の12校の協力のもと多くの記録を収集することができた。ただし、当初予定していた図画工作や美術以外の教科等の活動の記録を収集することは思いのほか困難であった。理由はいくつかあるが、最も大きいのは人手の不足と予算の不足であった。特にVTRに記録するための人手の不足が問題であった。というのは、子どもの活動を記録するためには、ある程度の訓練が必要であることが徐々に分かってきたためである。したがって、VTR記録の作成は研究代表者自身と若干名の協力者に頼まざるを得なかった。さらに、学習の性格によってそろえる器材、記録の方法も変化してくることも分かった。このため、この研究では図画工作と美術の授業記録を収集することとし、方向性をいくらか絞らざるを得なかった。とはいえ、小学校、中学校の協力のもと、図画工作や美術での子どもの活動の記録は十分にそろえることができた。

これらの記録を分析するにあたっては、子どもの活動（行為、発話、周囲の状況等）を

文字化し、そして、子どもの行為の一つひとつを抜き出した。さらに、それらの行為の意味関連を図式化した。一連のこれらの作業により子どもの活動を構造化した。

これらの構造が明らかにされたことで子どもの行為と行為のあいだの意味関連をとらえることができた。さらには、行為する子どもとともに活動する他の子ども、または教師の行為との意味関連、材料や用具、または、活動する場との関連もとらえることができた。いずれにせよ、複雑な意味関連のあいだで子どもの表現行為は展開していることが明らかにされた。

ただ、当初の行う予定であった活動の構造の類型化は実現できなかった。理由は、類型化すること、すなわち、子どもの活動を型にはめ込んでしまうことによって、子どもの意味産出の行為に含まれているニュアンスが覆い隠されてしまうためである。ひとつの意味産出の行為を取り上げ、その意味関連をとらえればとらえるほど複雑化することが明らかになり、それを何らかのパターンに当てはめることそのものが無意味であることが分かった。

とはいえ、子どもの意味産出行為の構造の複雑さから、逆に言えることもあった。それは意味産出の行為が実現するためには、子ども自身が、または、その周囲が持っている意味空間の複雑さ、すなわち、豊かさが生かされなければならないということである。

そして、このような活動が観察される授業は、基本的に子どもが主体的に活動できるよう題材を設定していることが明らかにされた。

逆に子どもの活動が型にはまっている場合、論理上(科学研究費補助金による研究平成15-17年度「芸術にかかわる教科等のカリキュラム開発に関する基礎的研究—テキスト理論を基盤として—)、意味産出の行為が実現しているとは言い難い。こういった活動もいくつか記録されたが、これらは、教師が(図画工作などでの)表現の手続きなどを具体的に指示し、表現の技法を細かく教え与えている場合に観察された。または、題材がはじめから型にはまった活動を余儀なくされるものである場合に観察された。

これらのことから、少なくとも子どもの意味産出の行為を実現するためには、子どもが主体的に感じ考え、試みることのできる題材開発が必要であることが明らかにされた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

- ・新野貴則, 「図画工作、美術教育における意味生成としての学びの論理」, 『美術教育学』, 29 巻, 査読有, 2008, pp. 395-407

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

新野 貴則 (NIINO TAKANORI)

山梨大学・教育人間科学部・准教授

研究者番号 : 60353380

### (2) 研究分担者

該当無し

### (3) 連携研究者

該当無し